

## 九州支部

大分医科大学医学部腫瘍病態制御講座

安部高志, 大谷哲史, 雨宮由明  
安藤俊二, 三戸克彦, 平田範夫  
時松一成, 永井寛之, 門田淳一

那須 勝

同 第2外科 中城正夫, 三浦 隆

同 病理部 加島健司

肺癌の画像所見は多様に富み、一見肺癌と異なるように思える陰影を呈する症例を時に経験することがある。症例は59歳、男性。びまん性のスリガラス状影を指摘され、当科紹介となる。両側肺末梢優位に淡い濃度上昇域と右S<sup>6</sup>に小結節影が集属したようにみえる径15mmの結節影を認めた。炎症性肉芽腫を疑わせたが、血清クリプトコックス抗原は陰性であった。精査を拒否されたため経過観察を行った。1年半後陰影は軽度増大傾向を示したため、胸腔鏡検査を施行し、肺腺癌であったため下葉切除を行った。

## 4. マルチスライスCTによる肺がん検診の検討

長崎県立多良見病院内科

福島喜代康, 江原尚美, 中山聖子  
奥野一裕

長崎大学第2内科

岡三喜男, 河野 茂

同 放射線科 芦澤和人, 林 邦昭

同 第1外科 赤嶺晋治, 岡 忠之

【目的】マルチスライスCT(MSCT)を用いた低線量薄層スキャンによる肺がん検診の成績を報告する。【対象・方法】対象は2001年6月から2003年3月まで長崎県立多良見病院の人間ドックで肺がんCT検診を受けた984例(男747例, 女237例; 平均54.8歳)。東芝社製Asteonを用い、撮像条件は管電圧120kV, 管電流30mA, 検出器幅3mmで判定はA~E2とした。【結果】初回受診者940例のE判定は48例(5.1%)。肺がんは11例(発見率は1170/10万)、異型腺腫様過形成、限局性線維化、肺内リンパ節、器質化肺炎が各1例。【考察・結語】MSCT検診は、胸部単純写真で指摘困難な病変の検出が可能であり、肺がん発見率も非常に高く有用と考えられた。

## 5. 経過中腫瘍辺縁のすりガラス影が縮小/増大した肺腺癌の1例

長崎市立市民病院内科

高谷 洋, 石松祐二, 道津安正  
神田哲郎

同 外科 井上啓爾, 小原則博

同 放射線科

南 和徳, 川野洋治, 福田俊夫

同 病理 河合紀生子

症例は57歳女性。検診で胸部異常陰影を指摘され当院を受診。胸部CTで左S<sup>8</sup>に約2cm大の不整形陰影を認めた。腫瘍辺縁にはすりガラス影(GGO)が存在し、これは経過中一旦縮小した後増大した。気管支鏡検査では確診は得られず、悪性腫瘍を疑い開胸術を行った。腫瘍は左下葉中葉側に存在し、迅速診断で肺癌と診断されたため左下葉切除術+リンパ節郭清を施行した。病理所見では腫瘍は0.9×0.5cm大の気管支肺泡型の高分化腺癌で、周囲の肺胞には組織球が集簇しておりlipoid pneumoniaの像を示していた。本症例におけるGGOの変化はlipoid pneumoniaを反映したものと考えた。

## 6. 心膜に原発したびまん性悪性上皮腫の1例

産業医科大学医学部放射線科

山田承子, 渡辺秀幸, 掛田伸吾

青木隆敏, 中田 肇

同 第2内科 太崎博美, 中島康秀

同 第2外科 永田好香, 安元公正

心膜原発性のびまん性悪性上皮腫は稀な疾患である。今回我々は胸腔鏡補助下腫瘍生検にて診断された1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて報告する。症例は51歳男性。平成14年6月下肢浮腫にて近医受診。7月のCTにて両側胸水と下大静脈の拡張を認めるも、利尿剤投与にて軽快した。10月、下肢浮腫が増悪したため入院。入院後の心臓超音波検査、CT、MRIにて心膜腔をびまん性に占拠する充実性腫瘍を認めた。11月、胸腔鏡補助下腫瘍生検を施行し、びまん性悪性上皮腫と診断された。腫瘍は鎖骨下動脈起始部から広範囲に存在し、心筋・心外膜と癒着していた。病変の性状・拡がりの診断にCT/MRIが有用であったので報告する。

## 7. 肺癌の脊髄転移の診断にMRIによる画像診断が有効であった2例

久留米大学病院第1内科

中尾栄男, 田中篤利, 戸田玲子  
合原るみ, 一木昌郎, 力丸 徹

相澤久道

肺癌の脊髄転移例は症状が多彩で診断に苦慮する例が多い。今回、髄内転移に対しMRIによる画像診断が有効であった2例を経験した。【症例1】44歳、女性。主訴は頸部から左肩の疼痛。平成11年肺腺癌stage IIIAにて右下葉切除術を施行。平成13年3月より頸部から左肩にかけ疼痛としびれ感が出現した。頸部MRIにてC3・C4レベルに髄内腫瘍を指摘。同部に対し放射線療法を施行した。【症例2】59歳、男性。主訴は右下肢麻痺。平成13年3月肺小細胞癌stage IVで化学療法と全脳照射を施行されCRであった。平成13年7月右下肢麻痺が出現。頸部MRIにて延髄下縁背側を中心に腫瘍を指摘。化学療法を施行した。文献的考察もふまえて報告する。

## 8. 経食道超音波検査が肺癌の下行大動脈への浸潤評価に有用であった1症例

鹿児島大学医学部第2外科

中村好宏, 渡辺俊一, 酒瀬川浩一

狩集弘太, 今釜逸美, 福森和彦

坂田隆造

症例は49歳、男性で、血痰を主訴に近医を受診し、精査で肺癌を診断され当科へ紹介となった。左S<sup>6</sup>に最大径3cm大の腫瘤を認め、下行大動脈に接していた。CT、MRI等より大動脈へのinvasionが示唆された。経食道超音波検査では、大動脈外膜の圧排は認められたが、中膜は保たれており、大動脈へのinvasionは否定的であった。人工血管置換術も念頭に置き、手術を行なったところ、下行大動脈への腫瘍のinvasionはなく、軽度の炎症性癒着のみであったため、左全摘およびND2bを施行した。超音波検査の局所分解能が高いことより、大動脈への腫瘍のinvasion評価に対する経食道超音波検査の有用性が示唆された。

## 9. PETで悪性が疑われた肺クリプトコッカス症の1例

鹿児島大学医学部第2外科

酒瀬川浩一, 渡辺俊一, 中村好宏